

国内のワーキングホリデーは、宿泊と食事は受け入れる農家が負担するが、交通費は自己負担で来てもらい、農家で農作業をして帰ってもらうというようなものである。これは年に何回もはしないが、気に入って、毎年のように来て、それを機に移住に踏み切る人が何人もいるということで、地域と移住希望者をマッチングさせるよい機会になっている。

ワーキングホリデーだけではないとは思いますが、このように自分でお金を出してまで来たいという人がいるのは地域にとっては非常にメリットがある。無料だから来てほしいという場合とは異なり、お金を出してまで来たいというのはかなり意欲を持っている人である。特に、ここではホームステイであることが多く、ご飯も一緒に食べて、農家の人と話し合うチャンスがたくさんある。そうすると親戚のような感覚になってきて、それが縁で、農家の人のいろいろなお世話で家を見つけてもらったという人もいる。このようにワーキングホリデーは労働を介して都会の人と田舎の人たちがつき合うよいチャンスになっていて、これがもう少し広がってもよいと思うのだが、仕組みを作るのが大変なこともあってあまり広がっていない。

関係づくりの場の提供はアイデア次第でいろいろなやり方があると思うが、一つ言えることは、3日くらいいればだいたい情が移ってくるということである。そのことから言うと、ふるさと体験は1泊2日か2泊3日であるので少し弱い。ただ、3泊4日になると、ふるさと体験としては負担が大きくて人が集まらない。ところが、ワーキングホリデーのように労働型だと3日や4日はさらにやらなければならないので、ハードルは高いが、定着率が高く、効果は非常にある。何かうまいやり方で3日や4日滞在してもらって、なおかつ、お父さんやお母さんがきちんとついてケアすれば相当仲良くなるので、それを手掛かりにするのは田舎暮らしにはお互いによいことだと思う。

(11) 住宅の問題

移住したいという人が増えてきた時に非常に大きな課題になると思われるのが住宅の問題である。今はほとん

どどの地域でも、移住したいという人が行っても空いている住宅や貸せる住宅がないという状態になっていて、空き家が出にくい状況であることが田舎暮らしが広がらない原因の一つになっている。

家の持ち主の側には、盆に使う、正月に使う、荷物がある、祭壇がある等々いろいろな理由があるが、そう言っているとこの課題はまったく前に進まない。空き家対策はアイデアを出さないと解決しない問題だが、空き家対策をうまくやって、10軒くらい在庫がある地域には人が相当入ってくる。本当に移住者を入れたいという地域は、空き家を探して何とか使える状態にして提供できるようにすることが大きな課題になってくると思われる。

(12) 地域の課題

以上のことを踏まえて、地域の課題として実際に何を取り上げていくかということについてであるが、一つには情報提供のやり方が考えられる。課題や人数や対象とするセグメントによって、地域やメディアや頻度を考えて情報を出していくというのはかなり高度なノウハウを必要とするが、自治体の職員だと2、3年程度で異動になるのでノウハウが蓄積されないという課題がずっと残る。だから、このことに関しては、地域の情報発信のプロパーというか、専門家をうまく育てて、その人にずっとメディアと仲良くしてもらうようなやり方も必要になってくる。これはよくNPOでやっていて、情報発信し続ける地域のNPOのようなものができる、そこには長く携わる人がでてくるので、情報がうまく伝わるというようなところがある。

次に、今後、本当に重要になってくると思われるのが都市と農村との交流であり、これに関しては、民泊や、特区なども利用して、何か自分の地域の新しい特性を作ろうまくPRをしていくというやり方がある。

施設の整備の面からは、クライנגルテンの滞在施設などが考えられるが、ここで重要なのはそれに付随するインストラクターの確保や育成だと思われる。もちろん、高度なものについては専門のインストラクターが必要だが、農作業レベルになると、おじいさんやおばあさんで